



【第2弾】 部活動派遣費を考える 地域円卓会議 in 豊見城

豊見城市における部活動派遣費の課題を地域で共有し、
商工業者・行政で子どもたちを支えていく体制を考える

実施報告書

日 時： 2021 年 11 月 29 日（月）18:30-21:10
場 所： 豊見城市市民体育館 サブアリーナ（沖縄県豊見城市豊崎 5-2）
共 催： 公益財団法人みらいファンド沖縄、NPO 法人豊見城市体育協会
協 力： NPO 法人まちなか研究所わくわく

報告書作成
NPO 法人まちなか研究所わくわく
公益財団法人みらいファンド沖縄

ACTIVITY REPORT

【報告】部活動派遣費を考える地域円卓会議



■日 時：2021年11月29日（月）18:30-21:10

■場 所：豊見城市市民体育館サブアリーナ

■着席者数：8名（論点提供者、司会、記録者含む）

■来場者数：12名（教育機関、企業、NPO・市民団体等）

■共 催：公益財団法人みらいファンド沖縄
NPO法人豊見城市体育協会

■協 力：NPO法人まちなか研究所わくわく

論点提供

沖山 亜紀子 氏

（NPO法人豊見城市体育協会 事務局）

豊見城市における部活動派遣費の課題を地域で共有し、 商工業者・行政で子どもたちを支えていく体制を考える

公益財団法人みらいファンド沖縄とNPO法人豊見城市体育協会では、「沖縄・離島の子ども派遣基金事業」と称した、部活動派遣旅費に対する助成事業を行っています。今回の円卓会議では、子どもたちの体験保証のための資金醸成に地域の商工業者等が参画することの意義を議論します。

センターメンバー



沖山 亜紀子
NPO法人豊見城市体育協会 事務局



真栄城 潤一
フリーランスライター、HUB 沖縄



野國 哲司
沖縄県豊見城市商工会 事務局長



河田 柚奈
女子サッカーチーム「casa okinawa ale」



河田 和佳奈
女子サッカーチーム「casa okinawa ale」



丁野 良太
オリオンビール株式会社
CSR・広報課 課長

➤ 円卓会議に参加いただいた皆さまから（板書の記録を元に作成）

事実の提供

- 豊見城体育協会の「豊見城市の子ども派遣事業」による派遣費補助の実績
 - 1年半で55名派遣の補助を行った。（登録選手5名、登録外選手0名、指導者17名、保護者33名）
 - 補助対象者は、登録外選手と指導者保護者その他関係者は行政の補助がなかったため補助することになった。
 - アンケートで帯同者の補助のニーズもあるということがいわれていた
 - 一人当たり補助対象経費（航空運賃、宿泊費、現地移動、楽器運搬費）の2分の1で最大5万円
 - 補助限度額を超えることはあまり無いが、団体競技の野球等では多くの飛行機運賃がかかった為、限度額5万円を使う場合があった。しかし、他の個人競技等は最大限に満たない場合が多い。
 - 申請がある時点で、県外大会に行く生徒が何人かと、帯同する登録外選手がいるのか確認をする
 - 最近はコロナのため、登録選手だけという大会が多い。
 - 登録外選手がいない場合、保護者指導者が対象になるが、生徒1人に対して、大人1人だけど最大でも大人2人までと決めている。
- 参加料も、県協会連盟が九州全国大会の参加料負担している種目もあるが、ほとんどが個人負担
- アンケート結果より、
 - ✓ 補助対象経費外→練習会場費、コインランドリー代、PCR検査などがあることがわかった。
 - ✓ チーム、個人で大会前に練習を行うために、練習場の調達は意外と大変
 - ✓ 選手の体調コントロールやパフォーマンスがしっかりできるかどうかを考えたら、帯同やコーチがいることで良いプレーができる。
- 行政の派遣補助の場合は、予算の関係上帯同の方々より、子どもたちを重視。本来、この辺も必要だが、見えない負担になっている
- 地域別で基金を募っていくという流れと、種目別で基金を募っていくという流れ、両方案としてある。
- 公益財団法人みらいファンド沖縄の沖縄離島の子ども派遣基金事業
 - 資金助成を受け、休眠預金法に基づき沖縄離島の子ども派遣基金事業を行っている。実行団体は、豊見城市体育協会を含め3団体。
 - 派遣費における現状をこの事業の派遣補助を行いながら調査し現状把握を行っている
 - 沖縄離島の子ども派遣基金を立ち上げ、事業を持続可能な形にしていきたいと考えている。
 - 公益的な事業に関して寄付者が税制優遇を受ける事が出来る。基金で寄付を募り、補助を出していきたいと考えている
 - 豊見城では地域別基金の設置を考えている。企業地域の方、部活を体験して大人になったOB・OGから寄付をいただき、旅費補助を行っていききたい
 - この事業を通じて、行政補助対象外の生徒や帯同者の必要性が明らかになってきたので、継続してこの部分の補助を出していきたい。
- 女子サッカーチーム「casa okinawa ale」
 - ✓ 練習は週5日2時間、西原・沖縄市などで練習
 - ✓ コーチは8人くらい、クラブチームは女子4クラブ（サッカー）
 - ✓ 練習場の場所は、監督や代表が取る。男子チームに女子がくっつくような感じ。コーチは8人くらいいる。
 - ✓ 大人の皇后杯の最終予選、アンダー18、フットサルの九州大会、アンダー15に出場した
- 商工会の集まりで、子どもたちの寄付を呼びかける機会がある
- オリオンビールなので、未成年の方との関わりを嫌がる親御さんもいる
- 甲子園など、県勢応援する気持ちに繋がっている
- 硬式野球部は派遣費3大会で250万の寄付を募った。1大会75万円の寄付集めを行った。コロナとか台風で流れてしまい残念な結果だったけど、その中で寄付を募るのはすごい大変だという話を聞いた

視点の提供

- 今回の派遣費補助の特徴は保護者や指導者も対象というところだが、それ以外にも経費負担がかかっていることが分かった。
- 県外の人と試合ができる機会が少なく、沖縄と県外の力の差を感じた。
- 子どもも保護者がいることで心強い安心感があり、親の応援は勝つてやるという気持ちになりプレーに繋がる。緊張を和らげる等、保護者が来てくれることは子どもにとっては大きい
- 基金のマネタイズ。寄付する企業のメリットの設計

- サッカー以外の部分でも、試合中にけがをした選手がいたら、相手チームの人でもすぐに助けに行き、けが人がでたらサポートしていた。しっかり周りが見え、気遣いなど行っていた
- 子どもたちの成長にも、メンタル面・体長面において保護者の帯同が必要
- 寄付の協力依頼がいろんなところから来ている。子どもの基金も出しているのに、新しいテーマ持ってこられても寄付の出し先に困る
- 他の子ども関連の基金に寄付を出している経営者には、子どもたちのためにすでに寄付を出していると感じている
- 自己負担が実際どのくらいだったのか、収支報告まであるとどれだけ足りなかった、次の大会に向けて、集め方や考え方についてアドバイスも出来ると思う。
- まず派遣費が大変な事実としてちゃんと示す。
- CSV (Creating Shared Value) 共通価値の創造
- 社会貢献+自社のメリット
- 対話をする必要がある。しっかり地域の企業と対話し、時間をかけてコミュニケーションを取ることが必要。
- 企業側が支援をするとき、売上や景気の影響がある。どうやったら win-win で子どもに支援し続けるか。
- ボランティアで全部持ち出しやるのではなく、社会貢献にもなり、その結果自社も何らかのメリットを受けるといった仕組みを作っていかなければならない。
- 子どもだけで県大会は難しい
- (ブランド力・コスト下がる・売上が上がる等)
- 寄付する側、寄付される側お互いを知ることが大事
- 経営陣が GO 出せる理由を一緒に考えること
- 寄付行為のメリット設計(これが、今後の基金を続けていく大きな部分) 持続可能なかたちへ
- 当事者じゃないと分からないことがとても多い。メディアとしての役割
- 地域レベルで全国大会に出るとなると色んなところで取り上げられるが、それ以前にも頑張っている子はたくさんいる
- 情報発信の部分は企業、行政に基金の紹介という形でうまく絡んでもらうのもできるのでは
- 部活も色々あるのでそこにある企業で大会の誘致での資金造成
- 大きく突き抜けた活躍をするにわかに注目が集まるが、継続性が難しい。寄付のあり方や基金のシステムを理屈付けて広げていく必要がある。
- 現状把握にも多大な労力がかかるが、拾えていない部分も多いのでそこもどうすくい上げていくか。
- 子どもの耳にも補助金が聞こえる自由に活動できる仕組みになっていけたらいい。
- 営利でやってはいけないというのは 1 つ共通のルールとしてやっているが、CSV の考え方で自社に何らかのメリットがあるというのは企業側が考えていかなければいけない時代に来ている

評価の提供

- 県外派遣の場合、ホテルに宿泊等いつもと違う環境のため、気持ちが不安になったりするが、この補助制度は、子ども 1 人につき保護者 1 人が帯同できるため、

試合前日のコンディション調整や当日の気持ちの入り方、持ち方等により効果がうまれる

事例の提供

- 子どもたちも一緒につれて企業にお礼するチームもある。キャプテンから結果報告させることで、子どもたちは地域の人たちが自分のためにお金を出してくれたことがわかり、お金を出したから大会の派遣に行けたということを認識する。後に大人になったときに、地域還元、地域貢献を必然とやってくれると思う。教育の一環としてこういうのも教えていくと寄付した企業は助かるし喜ぶ。
- 食料品の製造会社を通じて、付加価値を付けてパッケージから 1 円とか 2 円とかを売上に回してもらう。

その時にはパッケージもそういう目的で商品の一部が還元されます。というような表示をしてお客さんが手に取ったときに「この様な活動でつかわれるんだ、じゃあ買ってみようかな」というように企業でなく、地域住民が営業マンになることで商品も売上が上がり、継続的な取り組みや収益の構造が出来る。県内でももうまくいっている商品が結構あるので、こういうものを参考にしながら継続的なお互い win-win な関係を築けたら継続できるのでは

➤ 今後のアプローチの方向性（提案）

1) 支援者への報告をしっかりと行う

地域企業に支援してもらえるには、個別の 1 対 1 のやり取りではなく、エリア内の事業者と助成を受ける個人・チームが複数で合意していくほうが最終的には継続性があると考えられる。この継続性の担保はやはり報告である。子どもたちの活躍はもちろん集まったお金がどの様に使われたのかということも含めオープンであることが大切

2) マルチステークホルダーのコーディネート

子どもたちの派遣にかかるアクションは、実は地域の関連会社のビジネスチャンスとも捉えられる。観光やスポーツ産業の方々さらには地場の商工や農水事業の方々の参画を促すことでさらに事業者側の課題を解決できるようなウィンウィンの関係性を築くことが可能ではないか。この成功条件はまさにコーディネートであり、支援事業の確度信用性を上げるために行政の旗振りは重要である。

■参加者によるサブセッション

地域で子どもたちを支えていく体制

(参加者記載の原文をそのまま記載している為、事実と異なることがあります。グループ毎に①、②・・・と記載)

①

- ・行政との連携
- キフを募る側からの説明の仕方
- ・体験を保障 / 学習
- ・市内も厳しい
- ・優秀な OBOG を排出
- ・メリットの深掘り (業界を巻き込んでビジネス)
- ・「部活」を広いターゲット / 支援 / 企業を監理

②

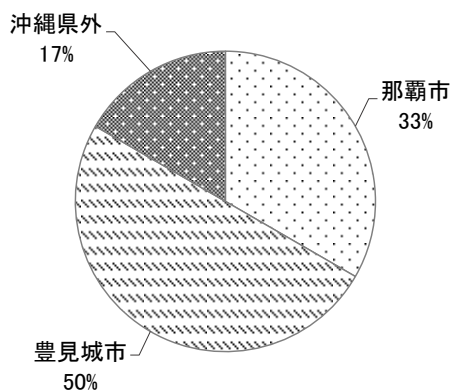
- ・20 社くらい
- ・250 万 (30 日分)
- 寄付金 150 万
- ・行政補助を使う予定だった
- ・グループライン 100 名 / 会社と子どもの写真で PR
- ・コロナで売上減→寄付 NG
- ・商工会 100 社→ボーリング大会
- ・去年の会社リストにアタック
- ・PR の仕方
- ・模合
- ・製造業者を中心に食品などに付加価値をつけて販売
- 地域の人たち皆が「営業マン」
- ・地域で応援したくなる物を

部活動派遣費を考える地域円卓会議 in 豊見城 参加者アンケート集計

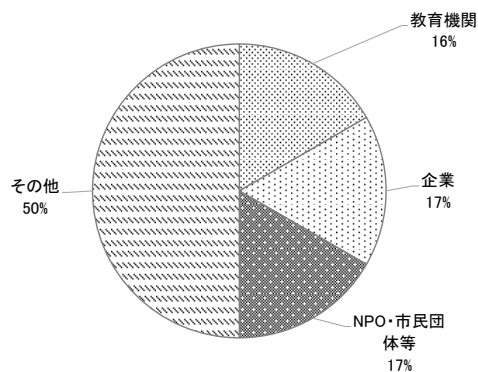
◆概要

- ・日時：2021年11月29日（月）18:30-21:10
- ・場所：豊見城市民体育館 サブアリーナ
- ・着席者：8名（論点提供者、司会、記録者含む）
- ・参加者：12名（アンケート回収6名、回収率50%）

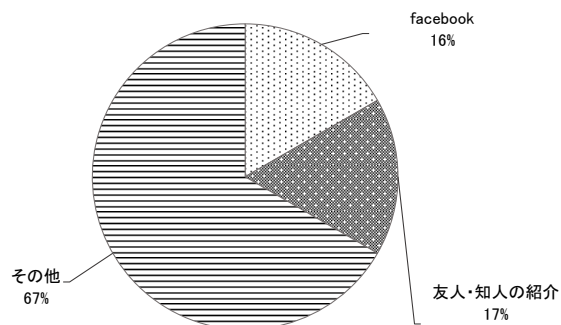
1. どちらから？



2. 所属



3. 円卓会議はどのように知ったか



4. 満足度

平均：4.5（5点中）

5. 満足	4. 概ね満足	3. 普通	2. あまり満足していない	1. 不満足
3名	3名	0名	0名	0名

5. 満足度の理由

（5. 満足）

- ・ 企業側の意見が分かり、とても良かった。
- ・ 当事者の方のお話を聞けて、助成金の意義をより理解しました。「体験の保証」だけではなく、「質の保証」であることを理解しました。
- ・ いろんな意見が聞けて良かったです。

（4. 概ね満足）

- ・ 色々な立場の色々な話を聞けて、衝撃的だった。

6. 円卓会議で印象に残ったこと

- ・ 一緒にメリットを考えていくことが大切だなと感じました。
- ・ 助成金は残り1年半なので、出口戦略のアイデアがいろいろ浮かんでくるような円卓会議となりました。
- ・ CSVの展開の話は可能性を感じた。

(写真) 会場の様子



部活動派遣費を考える

地域円卓会議

in 豊見城

地域の国にこそ
社会課題... 共有で解決しよう

テーマ

豊見城市における
部活動派遣費の課題を
地域で共有し、
商工業者・行政で
子どもたちを支えていく
体制を考える

共催 (公財)みらいファンド沖縄, NPO法人豊見城市体育協会
協力 NPO法人まちなか研究所わくわく

第2弾

2021.11.29 (月)
18:30 ~ 21:10
② 豊見城市市民体育館
サブアリーナ

論点提供

沖山亜紀子 NPO法人豊見城市体育協会

1年半

55% 補助してきた

登録選手	5名
外選手	0名
指導者	17名
保護者	33名

対象経費

- 航空運賃
- 宿泊
- 現地移動
- 楽器

対象外経費

- 練習会場費
- コインランドリー代
- PCR検査 など

行政補助は、 宗同者は対象外

ききとり

子どもだけで 県外大会
はむずかしい

大人

他の子とあそぶ
責任これない

コロナで欠航となった
ときなど対応むずかしい

子ども

親の応援「勝った」
という気持ち
きんちょうける

野球 → 指導者2名
助成

嘉数なりこ
みらいファンド沖縄

JANPIA	MFO	実務団体	部活動
	休職預金	(500円)	

地域
OB OG
保護者

施設
500円以内の助成

⇒ 沖縄 離島の
子ども派遣基金 ⇒ 助成

地域
企業 キフ
OB OG
保護者

⇒ 地域基金
(豊見城市) ⇒ 助成

⇒ 豊見城市
体育協会

③

河田 柚奈 さん 長程中3年
casa ale okinawa 所属

河田 知佳奈 さん

練習 週5日 2h
西原・沖縄市などで練習

コーチ 8人
クラブチーム 女子 4クラブ (サッカー)

フットサル九州大会
U15全国女子大会)へ参加

(丸) 前日入 → 練習 → 大会
(全) 前々日入

県外と沖縄の差を感じた
試合の中でのケアへの対応など
まだできないと気づいた

サッカーだけでなく自分たちだけじゃできない
基ッから練習しておし
次の大会で勝つたい

ホテル宿泊
保着者つくことで
コンディション調整
気持ち面でよい効果

1人につき保着者1人のしくみよい

サッカー続けたい → 県外へ
レベル高い環境で

野國 哲司 さん
沖縄県豊見城市商工会 事務局

メンタル面
体調面) → 必要だと保着者の帯同

経営者 → こどもたちのために
すでに出しているよ、と感じる
こともあるのでは

使えまさせるよ
使えと選択する ということもできてるかも

前大会あたり
子どもたちもフジがけ → 結果報告
からお礼
かきつけ + 収支まで

子どもたちの成長にも

④

丁野 良太 さん
オリオンビール株式会社 CSR広報課 課長

福祉政策は救済より防貧で
貝志堅 宗精 (創業者)

CSV Creating Shared Value 共通価値の創造
社会貢献 + 自社のメリット

基金のマネタイズ ← キフする企業の
メリットの設計

ブランド力
コスト下がる
売上が上がる など
大変のケースもやろの大変なひ化

持続可能なカタチへ

キフする側
キフされる側) お互いを知る
こと大事
対話が
必要

経営陣が
G10出せる
理由と
いっしょに考える
こと

真栄城 潤一 さん
フリーランスライター HUB沖縄

キフ行いのメリット設計 継続性
部活 → これまでも、これからもある

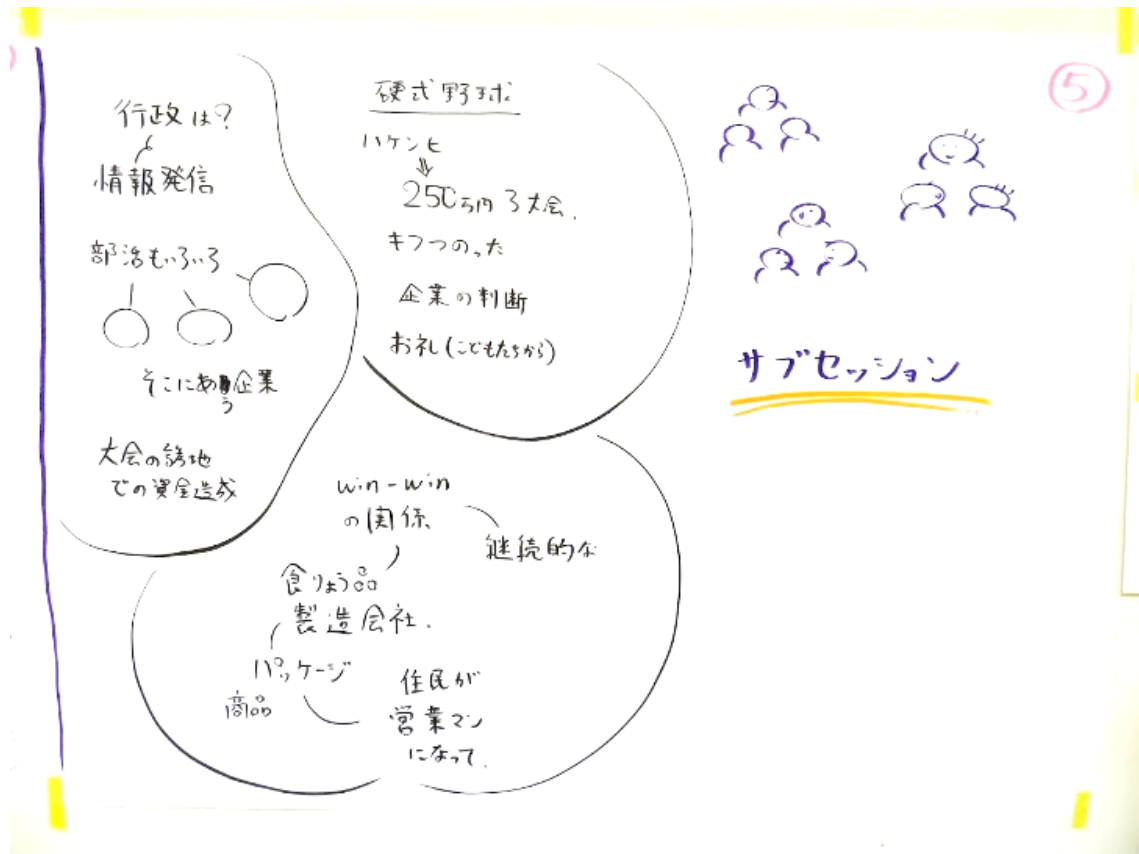
いかに情報共有するか (見えるように)

県勢応援する気持ちにつながっている
甲子園など
競技 個人
団体
全国大会
その手前

ずっと続ける
伝え方

子どもにも
お礼金も
自由に活動できる
しくみになって
いけたら

和
信
奈
さん
いろいろ人々たちの
支えに感謝して
とりこんでいきたい



士地がどうなるかを考える体制

- 行政との連携
→ キツを養う1994年の訪問の12社
- 体験と保障 / 学習
- 市内企業を支援
- 1994年0804社を12社
- X1111の海浜(費用を生かして、七ヶ浜)

課題: 20社
目標: 60社(30分) 250万(30分)
→ 寄付金150万

活動:

- 行政補助金使用決定
- 7月-7月LINE 100名 / 全社と地元企業PR
- 30Tを売上減 → 寄付NG
- 高企100社 → ボーリング大会
- 主幹会社リストにPR
- PR会社

- 製造業を中心に、食品などに付加価値をつけて販売
⇒ 地域の人たち皆が「営業マン」
- 地域で応援したくなる物を